

「Wisdom and Mercy」に見る能海寛

タイトル	「Wisdom and Mercy」に見る能海寛
著者名	高本康子
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第 14 号
ページ	1－12
発行年	2009.3.15
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)

ISSN 1883-4183



中国僧姿の能海寛

能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。 石峰と号す。明治元年5月18日島根県浜田市金城町長田（当時は東谷村）浄蓮寺に生まれる。12歳で得度し、慶応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山による体力の練磨をなす。郷里にあつては地方史を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として釈迦直伝の大蔵経の經典を求め英訳經典世に出す目的で当時鎖国中であつたチベットへ求道のため身を挺し仏教巡礼探検を実践した功績は偉大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓を残す。その苦難の34年の生涯に「般若心経」西藏文直訳（梵・藏・漢・英）など四巻が著書として永遠に伝う。

「Wisdom and Mercy」に見る能海寛

群馬大学国際教育・研究センター 高 本 康 子

1. はじめに

能海寛が英文で作成した資料「Wisdom and Mercy」には、すでに第1巻第1号、2号、3号があることが知られており、このうち第1巻第1号は全頁が写真撮影され、「能海寛の英文日記『Wisdom and Mercy』」と題してその写真が掲載されている（『石峰』第3号、1996年、28-40頁）。またこれらについては、当会副会長の岡崎秀紀氏によるいくつかの論考があり、例えば、ウエストンに関する記述を分析した岡崎秀紀「能海寛と日本アルプスの父 W.ウエストンとの出会い—1890年（明治23年）の慶應義塾を舞台にして—」（前掲『石峰』第3号、1-27頁）、アーノルドに関する部分を取り上げ原文を活字化した岡崎秀紀「慶應義塾時代の能海寛について—「慶應義塾学報」とアーノルド卿との出会いを中心に—」（『石峰』第5号、1998年、51-80頁）がある。

本稿で取り上げるのは、これらに続く第4号、第5号である。この2点は、浄蓮寺所蔵資料について、能海寛研究会が浜田市の委託を受け、「能海寛歴史資料調査」として2007（平成19）年6月末から2008（平成20）年3月2日まで約半年間行った、整理・調査活動の際に発見されたものである。同調査の詳細については、『石峰』第13号（2008年）に詳細が掲載されている（「能海寛歴史資料調査を終えて」、41-47頁）。本稿では、この2点の新発見資料を概観し、その特徴を探ることを目的とする。なお、本稿の内容はすべて、2008年7月13日の能海寛研究会研究大会においてすでに発表したものである。以下本稿における翻訳の日本語文はすべて高本による。

2. 「Wisdom and Mercy」資料の概要

「Wisdom and Mercy」とタイトルのついた資料には、以下のようなものがある。

- ①第1巻第1号（1890（明治23）年1月31日付）
- ②第1巻第2号（1890（明治23）年2月28日付）
- ③第1巻第3号（1890（明治23）年3月31日付）
- ④第1巻第4号（1890（明治23）年4月16日付）
- ⑤第1巻第5号（1890（明治23）年5月1日付）
- ⑥第1巻第1号（1890年（明治23）6月1日付）
- ⑦第1巻第6号（1890（明治23）年6月16日付）

このうち、⑥は表紙のみである。各号は最初頁に目次が掲げられている⁽¹⁾。それによる

と、例えば第1巻第4号は、『反省会雑誌』の目次を参考に訳語をつけるなら⁽²⁾、「社説」（Editorials）2頁、「論説」（Leading Articles）2頁、「雑報」（General News）2頁、「蒐

録」(Miscellaneous) 3 頁、「広告」(Advertisements) 1 頁、計 10 頁という構成になっている。第 1 巻第 5 号も、第 4 号とほぼ同様に、「広告」の前に「翻訳」(Translations) が入れられている点異なる⁽³⁾。

「Wisdom and Mercy」が書かれた時期はいつであるのか、という点については、この時期の能海の英文日記である「春秋の日記」第 5 号に、各号の制作に関して言及がある。すなわち、第 1 巻第 4 号については、「「Wisdom and Mercy」第 4 号を夜作る」(「春秋の日記」第 5 号、1890 年 4 月 5 日付)、第 1 巻第 5 号については、「「Wisdom and Mercy」第 1 巻第 5 号を編集した」(同、1890 年 5 月 1 日付)とあり、作成の日付はこれでほぼ明らかであると思われる。

能海自身はこの資料について、「「Wisdom and Mercy」は月刊の雑誌であり、世界的宗教と、時事的な事柄についての情報を内容とする」(「Wisdom and Mercy」第 1 巻第 4 号、6 頁)と述べている。この記述には、彼の当時の関心のありようが、端的に示されていると思われる。すなわち、彼は、当時最も関心をもっていた英語と仏教こそが、国際的に世界規模で普及しうる宗教という理想像と、激動の時代状況を繋ぐものであると考えていたと推測できるのである。

書かれている内容は、大きく分けると、以下の五種となる。すなわち、①能海自身の抱負や意見を披瀝したもの、②随感、③仏教に関する記述、④彼と周囲の人々の動静について書いたもの、⑤備忘録のような断片的な記述、である。

まず①能海自身の抱負や意見を披瀝したものであるが、これが大部分を占める。これについては、本稿第 3 節「資料内容における注目点」で述べる。

②の、その時々随感を記述したものには、自分の人生に関するもの、例えば将来への展望、思い出や自身の人間性などについて書いたものと、周囲の美景など、見聞きしたものに対する感想の 2 種に分けられる。

前者に関しては、例えば、「私が 33 歳になる時、父と同年となる。父は明治 8 年 8 月 16 日に、この 33 という年齢で亡くなっているから、この年齢を越えて私が生きれば、父よりも私が年長となる」(「Wisdom and Mercy」第 1 巻第 5 号、5 頁)という記述がある⁽⁴⁾。

また、後者については、「夕景 5 月 10 日の夕方、私はひととき大きく鮮やかな太陽を見た。諸君はこの夕べの美しい景色をどのように思うだろうか。刻々と時間はすぎ、夕日は西の丘陵へと沈んでいった」(「Wisdom and Mercy」第 1 巻第 4 号、9 頁)等という記述がある⁽⁵⁾。

次に、③仏教に関する記述としては、そのほとんどが、教義に関するキーワードを簡単に説明したものとなっている。これら仏典の英語への翻訳を念頭においた、いわば習作とも言えるものである⁽⁶⁾。これについても、本稿第 3 節「資料内容における注目点」で述べる。

④の、彼と周囲の人々の動静について書いたものには、例えば、「わたくしは『世界と

浄土』と題する書を執筆するつもりである」（「Wisdom and Mercy」第1巻第4号、6頁）、

「わたくしは今日から、豚、鳥、ドジョウを決して食べず、酒も飲まないことにした^{マツ}（酒

については、4年前から断っている）」（同、7頁）、「第一回会合 我々、慶應義塾における仏教徒学生は、開祖聖誕祭の名目で、1890年5月24日、最初の会合を行った。麻布において行われたイチウオハシの海水浴には、9人のメンバーが参加し、様々なことを話し合い、非常に面白く楽しい時を過ごした」（「Wisdom and Mercy」第1巻第5号、4頁）等といったものがある。

⑤の、備忘録のような内容は、いずれも断片的で短い。「ツルカワ、タニグチが故郷に戻った」（「Wisdom and Mercy」第1巻第4号、6頁）、「京都にある海外宣教会の支部が、英国ロンドンに設立された」（「Wisdom and Mercy」第1巻第5号、8頁）といった記述である。

3. 資料内容における注目点

この「Wisdom and Mercy」資料の内容において、注目すべき点は、大きく2種に分けられる。一つは、①この3年後の1893（明治26）年に出版される能海の著作『世界に於ける仏教徒』に繋がるとされる諸点であり、もう一つは②能海の履歴を明らかにする上で有益な情報を提供する記述である。まず①について、『世界に於ける仏教徒』以前の、能海の思考内容を知る上で貴重な情報であるという点から、注目すべきと思われるものを、以下いくつか挙げる。

①『世界に於ける仏教徒』の前段階として

a. 仏典翻訳をしていること

能海は『世界に於ける仏教徒』において、仏教関連文献の英文への翻訳の持つ重要性を指摘している⁽⁷⁾。理由としてオルコットの『仏教問答』が15、6カ国語に翻訳され広く読まれていることを例に挙げ、英文であれば他の言語への翻訳も迅速に行われ、普及が早いことを述べている。

これは能海のみが持つ認識ではなく、『反省会雑誌』や『教学論集』にもこのような記述がある⁽⁸⁾。これらの雑誌の記述と『世界に於ける仏教徒』を結ぶものが、「Wisdom and Mercy」に見られることに注目したい。

まず、『世界に於ける仏教徒』同様に、オルコットを例にとりて翻訳の重要性を指摘しているのが、「Wisdom and Mercy」第1巻第1号である⁽⁹⁾。更に、仏典英訳の習作ともいうべき、いくつかの記述がある。もっともまとまったものとしては、「二河白道の比喻」の英訳がある（「Wisdom and Mercy」第1巻第4号、10頁）。これは阿弥陀仏の救いを説く比喻であり、火の河と水の河の2つの河の間に、白い道が通じているという光景を、人

間の食欲と怒りのはざまに極楽に通じる道、すなわち往生を願う信心があるということの例えに使用したものである。これは、中国唐代における浄土教の大成者善導（613-681）が、その主著『観無量寿経疏』において説いたもので、浄土真宗の根本聖典の一つ、親鸞の『教行信証』にもある有名な比喻である（『顕浄土真実教行証文類』真宗聖典編纂委員会編『真宗聖典』東本願寺出版部、第3版1980年、219-220頁）。

b. 「世界（的）宗教」について

『世界に於ける仏教徒』の基幹となる概念のひとつが、「世界ニ於ケル一統宗教」たる仏教、というものである。能海は同書において、「世界ノ一統宗教」（『世界に於ける仏教徒』、91-92頁）、「宇内一統宗教」（同、27頁）、「五洲ノ一統宗教」（同、51頁）という表現を使用するが、いずれも、ある限られた地域ではなく全世界規模で展開する、つまり日本国内に跼蹐しない、一貫したシステムを持つ宗教、という意味で使われていると言える⁽¹⁰⁾。

この前段階になると思われる言葉が、「Wisdom and Mercy」の「世界（的）宗教」すなわち「world religion」ということばである。「Wisdom and Mercy」においては、第1巻第4号の社説が「世界（的）宗教」の初出であり、この社説で能海は、キリスト教と仏教を、智慧と慈悲という2点において比較し、どちらがこの「世界（的）宗教」にふさわしいかを論じている（「Wisdom and Mercy」第1巻第4号、1-2頁）。

能海が『世界に於ける仏教徒』において使用した「一統宗教」という言葉は、中西牛郎が翻訳をした際に使用している（フィリピン群島米国領事ラツセル、ウエツプ「一統宗教ヲ論ス」中西牛郎訳、『反省会雑誌』第17号、1889年4月、17-20頁）。彼は「一統宗教」を「単純ノ真理ヲ以テ基礎トスル」宗教とし（18頁）、「世界人類ノ一統宗教」という形で使用している。この「世界人類ノ一統宗教」は、仏教ではあるが、「今日東洋人か妄信スル所ノ仏教ニアラサルナリ（中略）即チ悉達太子ノ宣説セル唯一ノ真理」（19頁）であり、「全世界億兆人心ノ墮落ヲ救フニ足ル」ものと定義されている。

また、『反省会雑誌』第5年第4号（1890年4月）は、本稿で取り上げた「Wisdom and Mercy」第1巻第4号、第5号とほぼ同時期の資料である。この『反省会雑誌』を能海が1890（明治23）年5月14日に手にしていることは、当該時期の日記である「春秋の日記」第5号の記述から明らかである⁽¹¹⁾。この『反省会雑誌』において、古河勇（老川）が、「寰宇の宗教」という言葉を使っている。これも、世界的規模で展開し、国際的に通用する教義を持った宗教、という意味で使用されているものである⁽¹²⁾。以上のことから、中西、古河両人の用語は、能海のいう「世界宗教」たる仏教の定義と共通の部分が多く持つものと言えよう。

c. 中西牛郎と宗教革命

次に注目されるキーワードは「宗教の革命」である。『世界に於ける仏教徒』においては、現在が「宗教大變動ノ時代」とされる（『世界に於ける仏教徒』、1 頁）。その「大變動」は具体的には、欧米におけるキリスト教から新しい宗教への変換⁽¹³⁾、日本においては「旧仏教」から「新仏教」へという変換という形で表れるものとされる。能海はこれらの変換を「宗教革命」と呼び、それらが実現する時期は「早晚」（同、6 頁）、「第二十世紀」（同、56 頁）とする。しかしこれらの「宗教革命」には、「革命」という言葉から連想される武力、暴力的なものは想定されていない⁽¹⁴⁾。能海が主張する「宗教革命」は、欧米においてはキリスト教対仏教の「精神的戦争」（同、56 頁）であり、日本国内においては、新旧仏教徒が「調和策」を論じるものである⁽¹⁵⁾。どちらにおいても、「世界一統宗教」の建設を目指して革命側の先頭に立つのは、日本の「新仏教徒」とであるとされる。

これに先立つ記述が「Wisdom and Mercy」に見られる。それは「世界的宗教への革命戦争」と題する文章である。ここで能海は、「世界的宗教」への変換を「革命戦争」と呼び、「鋭い筆力と、智慧と慈悲という優雅なものによって戦われる知的な戦争」と定義している。更に、この「宗教の革命戦争」は、「理論的なものと非理論的なもの」の間で戦われるもので、「ペンと論理」を武器に全世界から人々が参加し、各メディアが戦場となって、「19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて」行われるであろう、としている（「Wisdom and Mercy」第 1 巻第 5 号、3 頁）。

以上のような彼の見解に大きく影響していると思われるのは、中西牛郎（1859-1930）である。「Wisdom and Mercy」の約 1 年前、すなわち 1899（明治 22）年には、中西の著書『宗教革命論』（博文堂）が出版され、話題を呼んだ。能海がいかに中西を高く評価しているかは、『世界に於ける仏教徒』の重要なキーワードの一つである「新仏教」について、中西の定義を二度も紹介し（『世界に於ける仏教徒』、12、88 頁）、その定義について「新仏教ノ意ヲ能ク表ハセル語ナリ」（同、88 頁）と述べていることにもうかがえる。この中西への評価は能海一人に限られるものではなく、例えば前述の古河老川も、仏教の改革について、「此改良此復古には一の標準を要す、我々此に至りて中西氏の宗教革命論を回顧せざるべからず」として、能海と全く同じ箇所を引用している（古河老川『老川遺稿』杉村広太郎編、仏教清徒同志会、1901、34-35 頁）⁽¹⁶⁾。

中西の思想に関する詳細な論考である星野靖二「中西牛郎『教育宗教衝突断案』について」（『思想史研究』第 6 号、2006 年 5 月）によれば、中西は熊本藩の漢学者の子として生まれ、同志社在学中に仏教研究を志し、『宗教革命論』を著したのち、西本願寺の支援を受け 1887（明治 22）頃から米国に留学した。帰国後西本願寺文学寮教頭に就任したが、寮長となった藤島了穂との不和により両名とも罷免された。その後新聞記者となり、この間井上円了の哲学館や、ユニテリアンの拠点であった惟一館で講師を務めていたと言われる。晩年は神道扶桑教に入り「大教正」まで昇ったという（58 頁）⁽¹⁷⁾。

『宗教革命論』の前後は、中西が仏教改革論を展開していた時期に属する。当時の中西については、上掲星野論文が指摘するように、『反省会雑誌』誌上に好意的な記述を見ることができる（星野靖二「中西牛郎『教育宗教衝突断案』について」、58頁）。例えば、「熊本なる中西牛郎氏ハ、頃日仏教改革に関する、一大著述に従事し、大略其稿本を草し終りたりと」（『反省会雑誌』第12号、1888年11月、32頁）というように、しばしば中西の動静が報じられている⁽¹⁸⁾。また、海外における仏教振興を目的として作られ、反省会とも強いつながりを持つ雑誌『海外仏教事情』には、「本会同盟員にて目下米国桑港に在留せる同氏の書簡」として、中西の米国宗教事情報告が掲載されている（『海外仏教事情』第3輯、海外宣教会、1889年10月、38-40頁）。

中西の『宗教革命論』については、『反省会雑誌』誌上に、釈宗演の『西南之仏教』と並べて新刊広告が大きく掲載されている⁽¹⁹⁾。またこの広告が掲載された第18号から2か

月後、すなわち『反省会雑誌』第20号に、別の書肆からも同様の広告が出されている⁽²⁰⁾。

このことにも、『宗教革命論』の人気ぶりの一端がうかがえよう。

更に1890（明治23）年6月、すなわち「Wisdom and Mercy」執筆から1か月ほどの『反省会雑誌』には、これはすでに、星野靖二「中西牛郎『教育宗教衝突断案』について」（『思想史研究』第6号、日本思想史・思想論研究会、2006年5月、58頁）に指摘されていることであるが、「若し真仏教の真運動を知らんと欲せば、即独り海外宣教会反省会に於てせよ、若し書にして見んと欲せば即左の書を見よ」として、齊藤聞精『仏教或問』、村上専精『仏教一貫論』、井上円了『仏教活論』、釈雲照『仏教大意』とともに、中西の『宗教革命論』と『組織仏教論』があげられている（『仏界の真著』、8-9頁）。中西のこの著作が、反省会の若い仏教者たちにとって、重要視すべき仏教論書であったことは、ここからも明らかである。

「Wisdom and Mercy」においては、この書を読んだ能海の感想がある。能海はこの『宗教革命論』について、「このように価値ある興味深いものを今日まで目にしたことはない」「その著に比すべきものを見ない」と述べ、中西を「空前絶後の哲学者」と絶賛している。中西の見解は、「非常に適切かつ善なるもの、真なるもの」であり、宗教に対する真摯な姿勢から生まれたものであると、高く評価している（「Wisdom and Mercy」第1巻第4号、1890年4月16日、論説、3頁）。ここには、能海が、非常に感銘を受けている様子がうかがえる。

中西については、例えば、池田英俊編『論集日本仏教史』（第8巻明治時代、雄山閣出版、1987年）のように、当時非常に注目されたことを認めつつ、「多分にアジテータ的言動が著しく、その活動には一貫性の乏しさが目立っている」（27頁）とする評価もあるが、しかし本論において注目したいのは、土屋詮教が『明治仏教史』（三省堂、1939（昭和14）年）において指摘したように⁽²¹⁾、中西が「新時代に適應する仏教の樹立を力説して、青年仏教徒の血を沸かしめた」（122頁）ことである。前述した『反省会雑誌』の新刊広告においても、「其論実に俗耳を驚かし事実に対峙するに似たり」（『反省会雑誌』第18号、

1889年5月、広告、37頁）と表現されているように、人の意表をついて注意を集める論だったことである。

実際、古河老川は「仏門人物輩出す」という題で、同時代に活躍する仏教者として、井上円了、南條文雄、村上専精、前田慧雲、島地黙雷、原坦山、大内青巒などとともに「中西牛郎氏は遙かに西埗より起りて、一瀉千里の健筆、大に天下宗教の活勢を痛論し」（古河老川『老川遺稿』杉村広太郎編、仏教清徒同志会、明治34年、22-23頁）と述べている。このことには、中西が当時において、その言動に注目を最もあつめる論者のひとりであった

ことがうかがえる⁽²²⁾。従って能海は他の反省会メンバーなどと同様に、敏感に最新の思潮に反応していたと言えよう。

では、能海の使用した「宗教革命」という言葉は、同時代においてどのような意味をもっていたのだろうか。初期の『反省会雑誌』の記述には、「宗教の改革」（第3号、1888年2月、社説、1頁）もしくは「仏教革命」（第6号、1888年5月、社説、6頁）が、「世界文明」（前掲第3号社説、1頁）、「世界歴史」（前掲第3号社説、1頁、前掲第6号社説、6頁）において、つまり世界的規模で、「遅くとも二十世紀の初め」（前掲第3号社説、2頁）、もしくは「遠きに非る」（前掲第6号社説、6頁）、つまり近い将来に起るとされている。「第十九世紀ノ仏教維新」（『反省会雑誌』第9号、1888年8月、26頁）という表現もある。

この宗教の改革については、「世界」規模だけではなく、日本国内におけるものとしても「真正仏教の改革」が言われている（『反省会雑誌』第5号、1888年4月、社説、4頁）。これは、国外・国内双方の「改革」が必要であり、その実行者こそ「青年の先導者」、「宗教の改革者」、「社会の保護者」（前掲第5号社説、2頁）である我々であると主張されている。その具体的施策が国内的には宗門改革であり、国外的には海外宣教とされた⁽²³⁾。

「Wisdom and Mercy」が書かれる前後においても、同様の記述が見られる。例えば、「宗教上一大運動ノ時期既ニ到達シタル」という記述は、上述した「改革」の実現時期について、初期のものと共通の見解を示したものであると言える（フィリピン群島米国領事ラッ

セル、ウエツプ「一統宗教ヲ論ス」中西牛郎訳、『反省会雑誌』第17号、1889年4月、17-20頁）。「仏教革命の大業は到底此世紀の末若くは来世紀の初めに於て必ず我日本の社会に落ち来るべし」とする記述も同様である（天外散士「普通教校人士」『反省会雑誌』第5年第4号、1890年4月、15頁）。従って以上の論点は、『反省会雑誌』の初期の段階から、「Wisdom and Mercy」が書かれた当時まで、一貫して共有されていたものであると言えよう。

以上に検討してきたように、この「Wisdom and Mercy」は、能海が、同時代の若い仏教者の一人として、外部の様々な情報を吸収し、それが彼の思考の基本的な部分となっていく様を具体的に示しているという意味で、貴重な資料であると言えるだろう。

②履歴についての注目点

履歴について、有益な情報となる可能性がある記述がいくつか見られる。その一つが、南條文雄との接触に関する記述である。例えば、以下のような記述がある。「わたくしはクワカドに手紙を送って、わたくしに手紙をよこすように、そして南條に会えるようになるかもしれない、ということを知らせるつもりである。そしてわたくしは彼に、経典『the people in a land』の翻訳を見せ、この2つの翻訳を見てくれるように頼むつもりである。そしてかれに E.アーノルド氏と宣教会、智慧と慈悲について話すつもりである」（「Wisdom and Mercy」第1巻第4号、10頁）。

最も注目すべきと思われるのは、慶應義塾と福沢諭吉に対し、厳しい批判をしていることである。長くなるが以下、該当箇所を全文引用する。「教育 わたくしは現在福沢氏の学校で学んでいるが、ここは自由教育の学校である。私は自由教育に非常に好感を持つものであるが、福沢氏の言う自由教育は、はなはだその本義を取り違えたものであると言わざるをえない。彼の教育は、いわば野蛮人の教育と呼べるだろう。礼儀もなく、学生を愛することもなく、（この間1行破損のため判読不明）。彼等は学校で自殺しているようなものである。彼等は何が道德で何が教育なのかわかっていないのである。このような状態が何年か保持されれば、学校は、怠惰な学生の遊び場と化すであろうことを、わたくしは確信する。現在において、本当の学生だとわたくしが信じられる人物は、この学校には甚だ少数である」（「Wisdom and Mercy」第1巻第4号、通信、5頁）。「我々の学校の日本語作文という課目において今日提示されたような命題は、学生にとって非常に悪しきものである。それは以下のようなものである。我が国金利の高き理由如何？我々学生にとって、何とばかりかしい命題であるか。悪いことこの上もない。（この間1行破損のため判読不明）。福沢氏は世界随一の愚人である。彼は最初に欧州を訪れているにもかかわらず、自分が賢いことを誇りながら愚行を続けている。彼は日本人の敵であり、可能ならば私は速やかに彼を殺してやりたい。彼は多くの学生から金銭を受け取っている盗賊である。彼は宗教については無知きわまりない。彼は自分が不公平ではないと言うが、私が彼に会った時は彼は大いに不公平であった。彼の不公平は彼が言うところの「ガキ」である。彼がいかに金銭を渴望する人間であるか、彼は□□□を知らない。彼の目は近い場所ばかりを見て、遠い将来を見渡すことができない。彼は国賊である。（この間1行破損のため判読不明）。私は彼を本当に好かない。彼は野蛮な教育者であり、文明国に属する人物とは思えない。つまり、彼は社会生活における体のいい泥棒ともいうべきものである。ああ、諸君よ、道德的であれ。決して道德に悖る行動はしないように。福沢は今生で英雄となったが、しかし彼は来世において囚人となることは確実である」（同、7-8頁）。

このような批判はすでに、「Wisdom and Mercy」第1巻第1号に見られる。彼は以下のように述べている。「教育 私は自由な教育を非常に望んでいる。慶應義塾のような野蛮な教育は望んでいないのである。なぜなら、この学校の学生の多くは、礼儀というものを知らず、帽子をかぶらない。私はあえてそれを野蛮な教育と言うのである。しかし私は普通教校あるいは文学寮のようなやっかいな教育を望んではない。ああ！私はこれらの双方ともに全くお金のためのものであると思う。前者は月謝をとり、後者は受け取らない。ああ！」（「Wisdom and Mercy」第1巻第1号、18-19頁）。

能海の批判の焦点は以下ようになる。慶應義塾の教育については、それが「野蛮人の

教育」であり、礼儀、学生に対する愛情に欠けるものであるとした。福沢諭吉についても、やはり彼が「野蛮な教育者」、「国賊」であり、金銭への執着の強さや、不公平、将来への展望を欠いていることなどが挙げられている。いずれも「文明国」にふさわしからぬ教育であり、教育者であるとして強い口調で批判している。

この批判のきっかけとなったものが何であるかは、現在のところ不明である。この時期の能海の日記である「春秋日記」第5号をはじめ、『時事新報』、『読売新聞』などの新聞、『反省会雑誌』などの雑誌にも、該当する記述はない。今後調査を続けていく必要がある。

(1)例えば「Wisdom and Mercy」第1巻第1号の目次には、「Editorial」、「Leading Article」、「General News」、「Collection of Short Phrases」、「Miscellaneous」、「Advertisement」

の6項目が示されている。

(2)例えば『反省会雑誌』第5号(1888年4月)を例にとると、「社説」(Editorial)、「欧米通信会来信」(Foreign Letters)、「寄書」(Contributed Article)、「蒐録」(Miscellaneous)、「学芸叢談」(Scientific)、「論説」(Leading Article)、「雑報」(General News)、「広告」(Advertisements)となっている。

(3)第5号の構成は「Editorials」2頁、「Leading Articles」1頁、「General News」1頁、「Miscellaneous」2頁、「Translations」1頁、「Advertisements」1頁、計8頁というものである。

(4)他には例えば、「能海！石峰！君は遠くを見ている、そして最も恐れを知らない人間である。(中略)英語は全世界において最も共通の言語であり、それゆえに将来における行動は世界的な規模でなければならないのに、君の持つ友人はある小さな島に限られている。地球上のすべての人々に比べれば、何というものであろうか。勉強せよ！恐れもなく遠望する時、君の運命は何と希望に満ちたものであろうか(4月14日)」(「Wisdom and Mercy」第1巻第4号、雑報、7頁)、「故郷に対する愛情 わたくしはもともと愛情の豊かなたちである。それゆえに、わたくしの愛情は、目に入るもの、聞くもの、味わうもの、嗅ぐもの、手で触れるもの、五感で感じるもの、これらすべてのものに向けられ、それぞれに対して深く愛情を感じるのである」(同、4頁)、「私の英作文の経緯はこのようなものである。最初のものは、思想というものは何もなく、次のものは、非常に真摯なものであったが、それ以上のものではなく、その次のものは少し進歩した、と言える」(同、8-9頁)等がある。

(5)その他、「雑報 四季の美景 春には、梅の花、次に桃の花、更に桜、牡丹、藤、躑躅等様々な花々に、我々は次々と目を引かれる。雪は消えて雨が降り、春雷は力強くとどろく。鳥は嬉しげに囀る。気候は段々と暖くなり、木々や野菜が緑の葉を広げる。炬燵やストーブを使わないようになる。多くの人が花見に出かける。夏には、農民たちが畑を鋤

や鋤で耕すのに目を引かれる。彼等は種をまき、旅人は木陰に陽の光を避ける。すべてのものが水や氷を求める。少年たちは海や川で水泳をする。(続く)」「(『Wisdom and Mercy』第1巻第5号、5頁)といったものがある。

(6)他には、涅槃について説明したもの(『Wisdom and Mercy』第1巻第4号、6頁)、人身の得難さについて述べたもの(『Wisdom and Mercy』第1巻第5号、2頁)等がある。

(7)例えば、「今日仏徒ノ大業ハ此翻訳ニ着手スルニアリ国語多キ中予ハ其第一着ハ英文ニ訳スルニアルコトヲ確信ス」といった記述がある(『世界に於ける仏教徒』、83頁)。

(8)オルコットの著作が複数の言語に翻訳されていることは、能海のこれらの記述に先だって、『反省会雑誌』誌上にも報じられていた(「ヲルコット氏仏教問答ハ現今十ヶ国の語に翻訳せられたり」『反省会雑誌』第11号、1888年10月、30頁)。また『教学論集』にも、仏教の「振起運動」のためには、米国への仏教の「東漸」をはかるべきであり、そのためにはまず「英文の教書出版」が不可欠であると主張されている(『教学論集』第58号、1888年10月、32頁)。

(9)ここでは、以下のように記述されている。「4000万人の全米国人が英語を使っている。

アイルランド人も同様である(イングランド、スコットランド、アイルランドの人々は、

どのくらいいるのだろうか)。また多くの植民地でこの言葉が使われているし、フランス、ドイツ、イタリア、スペイン、ヨーロッパ全域とメキシコ、南アメリカ、インド、中国、韓国などで、外国人がこの言葉を話している。『仏教教理』を見よ！それは英語で書かれているのだ。したがってその書はヨーロッパ、アメリカ、インドなどにおいて最も有名な本であると言える。そしてドイツ語やタイ語、日本語、タミル語に数年の間に翻訳された。これはひとえに、この本が英語で書かれていたためであったと言える」(『Wisdom and Mercy』第1巻第1号、第9頁)。

(10)例えば「世界ニ於ケル一統宗教」という表現は、以下のように使用されている。「第二十世紀ニ於ケル東西両洋ノ勝敗ハ十九世紀ニ於ケル如キ物質的ニアラズシテ仏耶両大教ノ精神的戦争ナリトス此等活潑ナル精神ヲ發揮スルニ於テハ探検ノ事業最モ必要ナリ何トナレハ先輩高僧ノ足蹟ヲ訪フ古来未タ明カナラザル歴史ヲ探究シ加之ナラズ従来仏教国互ニ隔離シテ久シク団結セザリシモノモ彼此相ヒ通シ仏陀五億ノ教徒ヲシテ揉テー丸トナシ古代高德ノ大胆勇壯ノ精氣ヲ再起シ万国伝道ニ怠ラズ仏教徒組織的運動ヲナスニ於テハ仏教ヲシテ世界ニ於ケル一統宗教タラシメシコト敢テ難事トスル所ニアラザルナリ」(『世界に於ける仏教徒』、56-7頁)。

(11)14日の部分には、『アジアの宝珠』第2巻第1号、『反省会雑誌』第29号もしくは第5年第4号届く」とある(「春秋の日記」第5号)。

(12)ここでは「寰宇の宗教」が以下のように使用されている。「真に万年の宗教として寰宇の宗教として、之より我徒の努力して宣伝すへきは唯一真宗あるのみと確信す」(古河勇「真宗一派の独行」『反省会雑誌』第5年第4号、1890年4月、9頁)。

(13)例えば能海は欧米における宗教の状況について、以下のように分析している。キリスト教はもはや、真摯な信仰の対象ではなく、政治的手段に成り下がってしまっている。無

智な、見識のない一部の人々が、キリスト教を習慣的に信仰しているにすぎない。他に適当な宗教、信奉するに足る宗教が出現すれば、欧米の人心はその新宗教に向くであろう。能海はそれを、「宗教大革新」、「宗教革命」と呼び、仏教こそこの新宗教にふさわしいものとしている（『世界に於ける仏教徒』、6-7 頁）。

(14) 例えば、彼はキリスト教の宗教改革が行われた際の状況を、「残忍粗暴ナル戦争」と形容し、そのような事態を避けるべきだとしている（『世界に於ける仏教徒』、93 頁）。

(15) 例えばその「調和策」のありようについて能海は、「本山執務ノ先輩ハ新仏徒ノ輿論ヲ容レ其意見ヲ採用シ又新仏徒カ仏教ノ大改革ハ本山ヲ中心トシテ本山内部ヨリ漸次新仏徒ノ萌芽ヲ発現セシムヘキコト」（『世界に於ける仏教徒』、93 頁）等と述べている。

(16) 原文は明治 24 年 1 月から半年間、『反省会雑誌』に連載されている。

(17) 中西の履歴については、他に、星野靖二「中西牛郎の宗教論」（『思想史研究』2、日本思想史・思想論研究会、2002 年 3 月、85-99 頁）、『国史大辞典』第 10 巻（国史大辞典編集委員会編、吉川弘文館、1989 年、621 頁）を参照した。

(18) その他にも、サンフランシスコ滞在中の中西の書簡「中西牛郎氏の書信」（『反省会雑誌』第 22 号、1889 年 9 月、28-29 頁）や、中西の翻訳（「一統宗教ヲ論ス」『反省会雑誌』第 17 号、1889 年 4 月、17-20 頁）が掲載されている。また、『宗教革命論』の次の著作として、彼の『組織仏教論』が注目されている様子が、「中西牛郎氏第二の著書、組織仏教論は、已に其半を終へられたる由にて、（中略）出版の上は学術上仏教の組織を明かにするを得て、宇宙を統一する一大真理の仏教に蘊在することを知らしめ、世の学者を益する蓋し小少に非るべし」という記述にうかがえる（『組織仏教論』『反省会雑誌』第 5 年第 3 号、1890 年 3 月、25-26 頁）。

(19) 広告の内容は、「今や顧みて我邦人の宗教世界を観察すれば仏教は、将さに落日の西に没せんとするが如く、耶蘇教は恰も旭日の東に昇らんとするが如し而して此書却つて仏教は耶蘇教を圧倒して之れに代立せんとすと断言す、其論実に俗耳を驚かし事実に対峙するに似たり然れども試に此書を一読して深く考ふるあらば必ず大に著者の活眼卓見に感服するものあらんとす、而して議論の大文章の美に至りては、我輩復た喋々せず」というものである（『反省会雑誌』第 18 号、1889 年 5 月、広告、37 頁）。ただし、ここに使用されている「議論の大文章の美」といった表現に関しては、同じ頁に同じ発兌元から、『宗教革命論』と並べて広告されている釈宗演の『西南之仏教』が、「其卓偉之識俊爽之文」（『反省会雑誌』第 18 号、1889 年 5 月、広告、37 頁）などと形容されていることから、この種の広告に慣用的に使用される辞句であると言える。

(20) 広告の内容は、「北洲居士著 仏教革命論 サア諸君御待兼ノ仏教革命論口漸ク出来上レリ陸続御注文之程偏ニ奉希候」というものである（「都屋書店広告」『反省会雑誌』第 20 号、1889 年 7 月、広告、39 頁）。

(21) ここでは、「破邪顕正仏教青年の運動」と題して、明治 20 年代前半の改革運動について、井上円了『仏教活論序論』『破邪活論』、北畠道龍『法界独断』、村上专精『仏教一貫論』、鳥尾得庵『王法論』『無神論』、前田慧雲『学仏南針』、大内青巒『釈門哲学叢書』、徳永満之『宗教哲学骸骨』などをあげ、「この間にあって中西牛郎は別個の見地から『組織仏教論』『宗教大勢論』を著し、新時代に適應する仏教の樹立を力説して、青年仏教徒の血を沸か

しめた」(121-2 頁)としている。

(22) 例えば、稻生典太郎「内地雑居論の消長とその資料」(『内地雑居資料集成』第 1 巻、原書房、1992 年)には、中西牛郎『内地雑居ト仏教之關係』(1894 年)について、以下のような記述がある。「著者はその頃本願寺のスポークスマンの如き地位にあった人物である。仏教界は挙げて内地雑居反対であったが、本書では内地雑居は早晚実現せざるを得ないという前提の下に、雑居実施の日までに宗教家として何を準備すべきであるか、新旧キリスト教の日本布教にはいかに對抗すべきであるかを論じている。当時流行した仏耶論争の指導書の一つでもある」(17 頁)。

(23) 例えば『反省会雑誌』第 9 号に掲載された「海外宣教会創設趣意書」には以下のような記述がある。「仏教西漸の本務を全ふすると同時に内宗門改良の一助たらんことを懇望し
(中略) 此集合体の勢力にして愈大なれハ海外宣教の線路愈広張し其隆盛なるに随ひて其反応を内国宗門の状勢に及ぼし自然に改良振作の効果を奏するに至るハ是視易きの道理なり是れ我輩が宗門改良に対する遠交近攻の最上策なりと確信する所なり」(『反省会雑誌』第 9 号、1888 年 8 月、附録)。
(能海寛研究会会員)